

札幌のメインストリート

## 駅前通

札幌の表玄関であり、初めて札幌を訪れた人の第一印象を形作る「街の顔」。そんな駅前通の変遷を紹介します。

駅前通は札幌駅南口を起点とし、オフィス街、大通、ショッピング街、歓楽街を貫き、中島公園に至る都心の南北軸です。このうち、時代の波により、その性格が最も大きく変化したのは大通以北の通りでした。

開拓使の本府建設計画は大通の北側を官地、南側を民地にするというものでした。そもそも駅前通も、北側の広大な敷地に建てられた開拓使本庁舎の東正面通として造成されました。

やがて、明治十三年（一八八〇年）に幌内鉄道の中間駅として、札幌停車場（現在の札幌駅）が設置されると、この通りは「停車場通」と呼ばれるようになり、明治のころから官有地の民間払い下げも盛んになって、次第に繁華な中心街路らしくなっ

きました。

駅の近くという場所柄、旅館が目立って多くなり、中でも山形屋旅館（北二西四）は、三階建てで屋根の上に物見台のようなやぐらを乗せ、「更上一層楼」と書かれた大きな額を掲げており、木造二階建てがほとんどだった当時は威容を誇りました。

赤レンガの五番館デパート（北四西三）も駅前通



昭和初期の駅前通。右手に山形屋旅館が見える  
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

を代表する建物でした。種苗・農具店の札幌興農園を前身とし、三十九年（一九〇六年）に駅前に進出した後は、札幌で初めてデパートを名乗り、横浜の西洋館を模したその造りが、異国情緒を醸し出していました。輸入品を多く置き、英国やフランスの油絵の具を札幌で最初に扱ったのも、この店だったといえます。

通りの両側には、豊かに葉を茂らせたアカシア並木が続き、旅人は樹間から街のたたずまいを眺め、札幌を「アカシアの街」と評しました。六月ごろには、白い花がこぼれるように垂れ下がり、路上に漂う甘い香りが、道行く人の心を和ませたそうです。

古くから札幌の歴史と共に歩んできただけに、駅前通は多くの文学作品に登場しています。四十年（一九〇七年）、札幌を訪れた石川啄木は「道幅の莫迦に広い停車場通りの、両側のアカシアの街樹（並木）、蕭条たる秋の雨に遠く遠く煙つてゐる。其下を往来する人の歩みは皆静かだ。男も女もしめやかな恋を抱いて歩いてゐる様に見える」（『札幌』より）と書き残しました。

昭和三十年代、高度経済成長期を迎え、啄木の見

た風景は、銀行や証券会社のビルが林立する近代的なオフィス街に変わっていききました。当時の街並みを思うと、隔世の感があります。

（平成十二年十一月号・第七十三回）



大正7年ごろの駅前通。レンガ造りの五番館が目をひく  
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）